

情熱が全て センスなんて一割二割。 情熱があるから人は努力する。

種子島との出会い

東京出身のさやかさんが種子島に初めて来たのは今から21年前。当時暮らしていた北海道から「半年だけサーフィンをする」という目的のために種子島に来た。しかし、いざサーフィンしてみると、思った以上に難しく「半年では上達できない。これは一生かけてするスポーツだ。」と思い、種子島への移住を決めた。

移住してからのさやかさんは、サーフィンが中心の生活。農業やアルバイトをしながら生計を立て、休みの日には海に通う、という日々。それはそれで楽しい毎日ではあったが、仕事のやりがいを感じていなかった。そんな中、仲間のサーファーたちと集まった際、その内の一人がギター片手に歌っているのを見て「すごい！かっこいい！私もやってみたい！」と思い、ギターを

始める。それがさやかさん30歳の頃。高校生の頃カラオケ大好きだった少女がシンガーソングライターへの一歩を踏み出した瞬間である。サーフィンで移住を決めたエピソードからも窺えるが、もともと凝り性で、はまるとストイックに追い求めるさやかさん。ほぼ独学でギターを習得し、自作の曲も作るようになった。さやかさんの澄んだ歌声にはファンも多く、地元のお祭りにはシンガーソングライターとして引っぱりだこ。また、中種子町PRCMでもその美声を披露している。

そして、さやかさんの「凝り性であり、一旦はまったらストイックに追い求める」という性格が彼女をカレー職人へと導いていく。

カレー職人への道

もともとカレーが大好きだったさやか

さん。しかし、つい最近までカレー屋になるなんて思いもしなかったという。さやかさんとインドカレーの本格的な出会いは、意外と最近で、おととしの一月。古くからの友人であり、今となつてはさやかさんのカレーの師匠である「ラガー君」を自宅に招いて開

いた料理教室で、「こんなに簡単においしくインド料理が作れるんだ！」と感動したのがきっかけでインド料理にはまっていた。今までも、はまると即行動のさやかさん。もちろん今回も即行動。まずは東京に行つて、インターネットで調べた料理教

私たちは「ひこぼえ」という「総合的な探究の時間」の中で女性の活躍について調べています。種子島の女性の就業率や、女性が働きやすいまちづくりなどを調べていく中で、輝く女性にインタビューすることになりました。今回インタビューした『川鍋さやか』さんは、カレー職人でもあり、シンガーソングライターでもあり、サーファーでもあり、一児の母でもありと、様々なことに挑戦している女性です。



川鍋さやかさん

室をはしごしていった。しかし、東京までの交通費や、料理教室の受講料など費用はかさむ一方。そんな時、さやかさんの心にある考えが浮かぶ。「これはもう、インドに行つた方が早い。(そして安い)」インドカレーに出会ったのがおとしの一月。そして、インドへの一人旅を決定したのが昨年十月。このスピード感には、いくらさやかさんが即行動の人だと分かっていても舌を巻いてしまう。ましてや、東洋人の女性の一人旅である。さすがのさやかさんも、インドに到着し、空港から出るような自分を見ていて、外に出た瞬間、一斉に物売り達に取り囲まれた時は足がすくんだという。日本で事前に知り合っていたインド人の友人の家に何とかたどり着き、そこから約一ヶ月間、カレー三昧の日々を過ごした。一緒にルームシェアをして

いる女の子たちや、近所のお母さんたちからインド料理を教えてもらったり、食べ歩きをしたりしながら研究していった。インドでは二・三分はありそうな量のカレープレートが日本円でたったの五十円で食べられる。色々な種類のカレーをたくさん食べたさやかさん。自身の胃のキャパシティが足りず、泣く泣く諦めたカレーもあったそうだ。

『サヤカリー』 開業へ

一ヶ月のインド旅行から帰国すると、いろんな人から「カレーを作つてほしい」と言われ、インドから買ってきたスパイスなどを使ってカレーをふるまいはじめると、さやかさんのカレーはどんどん評判になっていく。周りからの要望に応える形でケータリングなどを始めはしたものの、さやかさんはこれからどう展

開していけばよいか悩んでいた。すると、友人の一人が南種子町にある「民宿HOPE」がシェアレストランをしていることを教えてくれた。自分のカレーが通用するのか、種子島の人たちがインドカレーを食べたいと思うのかなど不安はあったが、HOPEで「サヤカリー」をオープンすることにした。結果、たくさんの人が来てくれ、今でも定期的にHOPEでサヤカリーをオープンしている。

そしてさやかさんは今、自分のお店の開業を目指している。店舗も西之表市に決まり、現在はメニュー開発と準備に追われる日々だ。コロナ禍の中、飲食店を開業することには正直不安だらけだが、やらなかったら後悔する、という思いで挑戦を決意した。これからのさやかさんの活躍と「サヤカリー」から目が離せない。

「自分の気持ち」と 「人との出会い」のタイミング。 この二つが揃ったらやるしかない。



自宅を改装した調理場で日々メニュー開発をしている



たくさんあるスパイスの中から合いそうなものを選ぶ



新作「合いがけカレー。」単独で味わってから最後は混ぜるのがオススメ

取材を終えて

自分の好きなことをやっている大人は、きらきらと輝いていて格好良かった。私たちもそんな大人になりたいと思った。さやかさんが何度も繰り返し使っていた言葉が「情熱が全て」だ。さやかさんは「センスがもともとある人なんて、一割二割。どんな人も情熱があるから努力する。」と言った。これは、言い換えると「情熱があれば自然と努力できる。」ということだ。私たちには、たくさん可能性がある。だから、好きなことを見つけ、全力で楽しみたい。そして好きなことに情熱を抱き、努力し、最終的にそれを仕事にできたらいいなと思った。また、そんな人たちが種子島に増えたら、やりがいのある仕事が増えて、地域活性化にもつながるのではないだろうか。

地域活性化のために

さやかさんが移住した時は、サーフィンができれば仕事は何でもいい、と考えて移住したそう。さやかさんだけでなく、このような感じで移住してきた人は多かつたはずだ。しかし、新型コロナウィルスの影響により、生活様式が変わった今、仕事を持ちながら移住するという選択肢が生まれた。大都会で働く多く

の人がテレワークを余儀なくされる中、「どうしてこんな狭い家に、こんな高額な家賃を払っているのか。テレワークで仕事ができるなら、広々とした田舎でのんびりと暮らしたい。」と思う人が増え、実際に田舎暮らしを始めた人もいる。そんな人たちが、移住先として種子島を考えてくれば地域活性化につながるのではないか。そのために必要なことを私たちなりに考えてみた。もし、週に一・二便でも東京・大阪への直行便があれば、仕事の拠点は都市、生活の拠点は種子島という「デュアルライフ（二拠点生活）」が推進できるはずだ。都市での仕事をテレワークでそのまま続けられれば、新たなビジネスチャンスをつかんだり、キャリアアップしたりしながら、自然豊かな種子島に暮らし、プライベートを充実させることができる。直行便があれば、必要に応じて都市にある職場に気軽に行くこともできるため、移住先として種子島を選択肢に入れる人も増えるはずだ。

今後は女性の活躍についてさらに探究すると同時に、地域活性化について、特に大阪・東京直行便の可能性についても探究していきたい。

種子島中央高校 一年

上妻咲希 葛ちひろ 高磯心路



サヤカレーの詳しい情報はインスタからどうぞ。